



想い | つくる | 伝える



[F u u d]
2019
秋号
—季刊—

鄙のしあわせ

2019 Eye's
新潟ここだけ物語

Take Free

ご自由にお持ちください

おとぎ話の絵本のなかから、抜けだしてきたような茅葺きの家「双鶴庵」。

ドイツ人建築デザイナーのカール・ベンクスが築150年ほどの茅葺きの家を解体し、独自のポリシーで再構築したベンクスデザインの再生古民家第1号。ベンクスご夫妻の住まいでもある。(十日町市竹所)

がんばろう ● ニッポン!

美味しい、楽しい、水の記憶

[村上市] 文 / 本望典子

にいがたの水辺 vol.3



小学校時代、三面川のすぐ近くに住んでいた。近所の友達と一緒に川遊びをしていた夏休みが懐かしい。川の水は真夏でもキンキンに冷たくて、入るだけでも大はしゃぎ。スイカを丸ごと冷やしてみんなで食べたり、サワガニを捕まえたり、カジカをヤスで突いたり…。さすがにアユは獲れないので布部地域にある漁場へ行き、ニジマスやヤマメと共に川魚メインのお昼ご飯を楽しんだ。今となって振り返れば、水遊びの監視役を務めなければならなかった母は大変だったことだろう。

そんな思い出を胸に今回、数十年ぶりのルートを辿ってみることに。昔の住まいや小学校を見て、漁場で炭火焼きのアユを食べた。「お姉さん、今日は会社ズル休みらかね」と笑うご夫人に「昔、この近くに住んでいたんですよ」と語る私。三面川のせせらぎの中、優しい時間が流れていた。

時期的に、アユが終わればサケの出番である。



私が小学生の時はなかった「イヨボヤ会館」を初めて見学。サケの母川回帰の習性を発見し、遡上する三面川を分流するという発想を実現させた青砥 武平治は、まさに村上が誇る功労者のひとりだろう。サケー“イヨボヤ”という呼び方も、村上独特の親しみが感じられて微笑ましい。「大切なサケを切腹させてはならぬ」と、鮭の腹を全て切らずに一部残しておく風習は、現代でもしっかりとこの地域に受け継がれている。

第三孵化場の近くでは、10月下旬から11月末頃まで伝統的な「居線網漁」が行われる。全国でも、ここ三面川にしか見られない貴重な漁法。この年になって再度、漁を見てみるとまた違った感想が生まれるような気がしてならない。

ちなみに、サケは4年ぶりに生まれた川へ戻るが、私が過ごした小学校の同級会も4年に一度、オリンピックの年に開催される。来年、また懐かしい顔ぶれと思い出話ができると思うと今から楽しみだ。



三面川(みおもてがわ)

概要 / 新潟平野の北端を西流する、全長約50kmの川。西朝日岳に発し、上流で猿田川、末沢川など、下流で高根川、長津川、門前川などと合流しながら、村上市瀬波で日本海に注ぐ。古くからサケ漁が有名で、江戸時代には村上藩の重要な財源であった。サケの伝統漁法「居線網漁」は、村上の秋・初冬にかけての風物詩となっている。

編集後記

「古い家のない町は思い出の無い人間と同じである」。カール・ベンクスさんの著書や紹介記事でよく目にする、日本画家・東山魁夷の言葉である。今号の取材でも同じにした。その時はベンクスさんの夢を端的に語るものと受けとめたが、原稿を書き終えた今、もっと深い想いがあることに気づく。異文化の地で、自らの信念と夢を貫めこうとした男の孤独を、その言葉が慰め励ましたのではないかと。竹所に活動の拠点を構えてからの四半世紀は、平坦な道ばかりではなかった。立ちはだかる壁を前に、独自の美を確立した画家の心情が萎えた心を立ち直らせたのだろう。ともあれ古民家再生住宅で小さな村を蘇らせた功績が認められ、2016年度に総務省「ふるさとづくり大賞」内閣総理大臣賞を奥様とともに受賞した。ベンクスさんが豪雪地の可能性を教えてくれた機会にもう一度、自分の足元を世界的視点で見直したいと思う。(渋川)

発行所

ふうど 編集室
まるごろ印刷の
株式会社タカヨシ

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目347上杉オオカミビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712
■名古屋営業所 / 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社1丁目79 第六名昭ビル6A TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト / <http://www.takayoshi.co.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】中央区・ANACラウンジ・ANAクラウンズ新潟、駅前オフィスNII GATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店など工房、朱雀メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ビアBandai、ホテルタイアーハ、ホテル日航新潟、リーガロイヤルホテル新潟、新潟空港、新潟市民芸術文化会館、くわこ区・桑名病院、パティスリー・カフルレアン、くわこ区・新潟大学附属図書館、佐潟荘、くわこ区・新潟市農業活性化研究センター、北区・新潟せんべい王国、ピューフ島潟、新潟空港、濱川公民館、くわこ区・介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、くわこ区・西蒲区・カーブ・ド・メヌ・ショオ、くわこ区・聖籠・聖籠音の湯 ざぶーん、【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会、【新潟市】加治地区公民館、紫雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市市民文化会館、新發田市立図書館、豊浦地区公民館、【聖籠町】聖籠音の湯 ざぶーん、【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会、【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、長岡西病院、やまこじ復興交流館おたらる、【燕市】分水ビターサービスセンター、【出雲崎町】越後出雲崎天領の里、【湯沢町】曾国觀光舎 越後湯沢温泉 【南魚沼市】桜苑、【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、【東京都】八王子区・表参道・新潟宿ネスバズ、中央区・ブリッジにいがた、千代田区・新潟市東京事務所、【横浜市】横浜区・表参道・新潟宿ネスバズ、中央区・ブリッジにいがた、千代田区・新潟市東京事務所、本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バイインダー

針金・糊・加熱が不要な
製本方法を採用し、
リサイクルや怪我の危険へ
配慮しています。

RICE INK
この印刷物は環境にやさしい
米ぬか油を使用したライスインクで
印刷しています。

朽ちかけた古い家。山あいの集落。

独自のデザインポリシーで蘇らせた一人のドイツ人がいる。建築デザイナーのカール・ベンクスである。古民家再生では、地元新潟だけでなく全国的に、その名が知られている。

自身も十日町市竹所という豪雪地の小さな集落に住み、自宅のほかに古い家を次々にベンクスデザインの家にし、小さな村の未来づくりに貢献している。

捨てるのは可哀想

どうして新潟を選んだのか。その活動の原点は何なのか。

卷之三

ての口言

想
古い家は日本の宝物

古くて新しい古民家

どうしてドイツ人のカール・ベンク

さんは、茅葺きの家に惹かれたのだろう。

北ドイツでも、伝統的な茅葺きの家があり、行政的な支援で景観が保全されているという。そんな郷愁にかられたのだろうか。ベンクスさんは感情の揺れを写す大きな眼が印象的で、その揺れ方に情の深さが見えた。廃棄されそうな家の話になると、とくに瞳が潤み愛惜の情が伝

このままでは、どこも行けなくなる
と思い西側行きを決意。それは日
本人の空手道場があるパリに行き
たいという一心で起こした行動で
した」。その年のうちに東西の境に
有刺鉄線が張り巡らされ、次々に壁
が建設された。ベンクスさんは東側に
残された家族とは会えなくなり、

は銃殺された。

計をたてながら、インテリアの勉強をした後、ついにパリの空手道場の門を叩く。そして大会で出会った日本大学空手部出身者から「強くなりたかつたら日本に来なさい」と誘われ、二十四歳でマルセイユから横浜に行く

A close-up photograph showing a person's hand holding a black cylindrical device, likely a sensor or probe, positioned above a stack of papers. The papers appear to be architectural drawings or blueprints. The background features a window with light-colored horizontal blinds. The overall scene suggests a technical or scientific setting, possibly related to document processing or quality control.

愛用の図面台の前に立つカール・ベンクスさん。

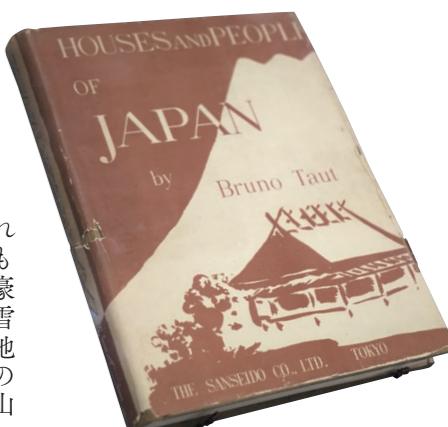


とたん、ひとめ惚れでした。帰りの車中で家の持主に購入の申し入れをする程です。豪雪地であることなど、まったく気になりませんでした」ベンクスさんの即決の背景には、竹所の環境もあった。真っすぐ伸びる杉に囲まれた村で、近くに棚田が広がる風景など、ヨーロッパでは見たことがなかった。五十歳になつたら仕事を引退し、自然のなかで便利な暮らしをしたいと思っていたベンクスさんの願いを叶える理想的な環境が竹所にあつたのだ。「いまでは世界中でただひとつふるさとです。でも四メートルも雪は要りませんけどね」と笑わせた。

日本の木造建築と、芸術と国際ビジネスの都市デュッセルドルフで培つたセンスが融合する、古くて新しいベンクス流古民家は、どのようにして創られたのか。

れも豪雪地の山深い竹所に来たのだろう。その始まりは遙かに遠く、明治時代の西欧で開催された万国博覧会から発したジャポニズムにあった。ベンクスさんは戦時中の一九四二年、ドイツの首都ベルリンで生まれた。フレスコ画の修復などをしていた父親は、ベンクスさんが生まれる二ヶ月前に戦死。「十二歳で柔道を習い始め、父の遺した日本の美術書や建築の本を眺め、ヨーロッパには全くない感覚に驚きました」。した。なかでもドイツの建築家ブルーノ・タウトが日本に滞在した三年半の間に見た日本の建築や精神性に関する本を読み、強い憧れを持つようになりました」。

そして東西冷戦下の東ベルリンで迎えた十九歳の夏。東西の境を流れるシュプレー川に飛び込み、泳いで西側に渡った。「政治的なことはわかりませんでしたが、町に軍隊が出動し不穏な空気が漂っていました。



ベンクスさんが日本に関心をもつきつかけになった
ブルーノ・タウトの「日本の建築と日本人(原題)」の
初版本。父親が遺した多くの蔵書の中の一冊。

日本の大工は

日本の職人は芸術家

どんな質問でも鷹揚に答えてくれたベンクスさんが、一度だけ表情を固くした。日本の伝統工法に精通していることに驚いた感想を口にした時、すかさず「古い家を解体するたびに一生懸命勉強してきた」と顔をしかめた。技術面でも日本人の誰よりも知識をもっているという矜持を、そ



豪雪地は宝の宝庫

部材も日本人なら、木の表面に鉋を

職人気質の大工。初めてベンクスさんに会った時の言葉が衝撃的だったという。

それは「日本の大工さんは世界一大工さんです。日本は普通の家でも二百年、三百年持たせる文化があ

日本の木造建築文化に惚れ込んで

れて嬉しかった。が同時に、なんの疑

自分が情けなかつたといふ。小山さ

宅、店舗など何でもこなせる。オールマイティな大工になることを仕事の

目標としていた事務所脇の工場には、自らカットした太い角材がきれい

れた柱の番付図が掛かっていた。

いろんなことを気づかされます。例えばドイツ製サッシは、すべて内側から取り付けるタイプ。これは実に合理的。取り付けが簡単で、気密性も高くなり素晴らしいです。新しく足す

の高いものの方に価値をおきます。
古民家再生はドイツ人のカールさん
だったからできましたことです」。
では、どうして雪国の古い家が優
れているのでしょうか。

「カールさんの現場は、ハードルが高
二十代の若者が新たに弟子入りする
予定。いろいろなことができる大工
になりたいと願い出でてきたという。
れません」。小山さんはところには、



東洋の伝記

その夢を叶えるパートナーのひとりが、小山建築の小山恭さんである。小山さんの地元である新発田市で古民家再生の施工をして以来、十七年近くの間、県内外に広がる数々の現場を担当してきた。「腕はいいけど頑固ですよ」というベンクスさんの言葉を思い浮かべながら、恐る恐る訪問。小山さんは父親の跡を継ぐ、

い場面が時々あります。でも、どんなに難しいことでも、駄目、出来ないと
は言わないできた。心配はあるけど
問題に向かっていけば、解決の道は
開けます。それより、いろいろな経験
ができることが楽しいです」と結び
ながら「カールさんは、ああ見えて、
なかなか頑固です」と笑いながら教
えてくれた。



二王子岳を望める畠に立つ小山恭さん。



小山さんが使い込んだ手斧と墨壺。大工の腕と心意気を象徴する昔ながらの道具で、棟上げなどの神事にも奉じられる。

切な宝物を捨ててきました。わたしの古民家再生は、築百年以上の家の

力 カールさんのお陰だね

伝える し あ わ セ の 芽

竹所は、いいところだよ

九月初旬、米どころ越後にあまねく黄金色の秋が来ていた。

新潟市から南西に下ること、車で約二時間。十日町市と上越市の境をなす小さい山々の群れにぶつかる。その横腹や山のなかを主要道路が通じている。沿道のいくつかの町や村は秋祭りの装いで昂り、見馴れた里山の田園風景がその興奮を薄めた頃、秋草のなかにカールベンクス村（竹所）の看板があった。起伏をもつてうねる道の両側や見あげる丘の上に、民家に交じりベンクス流の古民家が夢みがちな表情で佇んでいる。おとぎ話の里のように見えるが、観光地では

なく、普通の日常が移ろう村である。

集落より一段高い場所に祀られている十二神社。幹廻りがひと抱え以上もある杉の古木が神域を守り、集落の長い歴史を伝えている。

竹所の近くに広がる星峰の棚田。



あさつきを植えている手を止め話をしてくれた佐藤文雄さん。元気な81歳。



ありあまる自然のなかで

この十二月で移住して六年めを迎える小野塚良康さんは「村のすべての家がお隣さん。集落内の景観を統一したり、道普請などの環境整備、周辺地域にはない独自のイベントなど住民が自立的に考え方活動をしていました。自分たちの村は自分たちで良くしていこうという意識が高く、外から来る人たちにも積極的で、竹所もないカールさんのお陰です」。

を知つてもらいたいという気持ちを皆が持っています。ですから外の人には、ここに来るとフレンドリーで温かい感じを持たれると思います。そんなふうに集落を包む開放的で温かい空気感は、あまりないと私は思います。昔からの行事も大切にしています。なかでも賽の神は、雪を固めた「かまくら」を作り、そのなかで串餅を焼いたりと他の地域にはないことをやっています」。ありあまる自然と静かな環境が何よりの魅力です、と三十代の小野塚さん。子どもたちを自分が育った松之山と同じ自然環境で育てたいと思い、家族で移住してきた。それが縁で、カールベンクスアンドアソシエイトで建築設計の仕事を就き、ベンクスさんの夢の実現を支えていた。実際に古民家の住み心地は「建築に関わっているせいか、真っすぐな建物ばかり見てきたので、家のなかで自然の曲がりのある柱や梁を見ていると落ち着きます。また建材

日本。その風土のなかで磨いてきた山の民の文明が、世界に誇れるものであり、人生を豊かにすることをベンクスさんが竹所の暮らしで身をもつて証明してくれた。

列島の七割近くを森林が占める日本。その風土のなかで磨いてきた山の民の文明が、世界に誇れるものであり、人生を豊かにすることをベンクスさんは竹所の暮らしで身をもつて証明してくれた。

不便と見られるがちな豪雪地でも、世界的視野でみればどこにもない可能性を潜める森だった。だから雪国の鄙には、あわせの芽がひとつ足早く出ていたのである。

「カールさんが、ここに茅葺き屋根の竹所の一年を話してくれた。佐藤文雄さん。昭和中期から平成十六年頃まで、竹所の区長を務め、集落の盛衰をつぶさに見てきた人で、歴史の証言者だった。

お詣りをし、また一盃です」嬉しそうに竹所の一年を話してくれた。佐藤文雄さん。昭和中期から平成十六年頃まで、竹所の区長を務め、集落の盛衰をつぶさに見てきた人で、歴史の証言者だった。

「カールさんが来た平成五年当時、竹所の世帯数は九世帯で、その後、五世帯まで減少し閉村するかどうかは、まだ決まっていませんでした。来年にはまた一棟の再生古民家が完成します。こんなに村が賑わいはじめたのは、他で進んでいます。

「カールさんが来た平成五年当時、

竹所の世帯数は九世帯で、その後、五世帯まで減少し閉村するかどうかは、まだ決まっていませんでした。来年にはまた一棟の再生古民家が完成します。こんなに村が賑わいはじめたのは、他で進んでいます。

「カールさんが来た平成五年当時、竹所の世帯数は九世帯で、その後、五世帯まで減少し閉村するかどうかは、まだ決まっていませんでした。来年にはまた一棟の再生古民家が完成します。こんなに村が賑わいはじめたのは、他で進んでいます。

「カールさんが来た平成五年当時、

読者の声 ~前号を読んで~



集落より一段高い場所に祀られている十二神社。幹廻りがひと抱え以上もある杉の古木が神域を守り、集落の長い歴史を伝えている。

インフォメーション

カールベンクス アンド アソシエイト(有)
〒942-1526 十日町市松代2074-1
TEL 025-594-7882

小山建築

〒959-2523 新発田市上中江359
TEL 0254-29-2278

語り継ぎたい日本人の自然観

その恩恵を受けながら、全く思つていなかった治水法について、前号の「川のなかの秘策」を読み、心に驚きと感動と、日本人・新潟人であることの喜びが湧いてまいりました。なかでも明治政府が外国人技師から「粗朶沈床」を導入する以前、江戸期に農民に広まっていたことは、日本人の自然観の証として語り継ぎたいと思いました。

(新潟市 70代女性)

オランダからの技術移転

新潟では多くの地で、粗朶沈床の仕組みが自然を守っていることは以前から知っていましたが、粗朶沈床がオランダからの工法ということを前号の記事で初めて知りました。先年、オランダを含めた西欧を旅した際の、穏やかにたゆとう川の水眺めたことを思い出しました。

(新潟市 70代男性)



十日町市が運営する移住体験施設の竹所シェアハウス。戦後に建てられた古い住宅をベンクス流古民家再生で建て直し、集落の景観を統一している。



もともと、この場所に建っていた空き家をベンクスさんが再生した個人住宅。瓦葺き屋根のどつりとした雰囲気をドイツの鉄平石で再現した。



牛舎の前の山に咲いていたオニユリ。



竹所集落の入口附近に建つ牛舎。繁殖用の黒毛和牛が数頭飼育されている。